

【論文】

釜石の待機児解消に自発的に取り組むママたち

若菜 多摩英(NPO法人 母と子の虹の架け橋)

I はじめに

「母と子の虹の架け橋」は、「ママハウス」と言う“ママと子の居場所空間”、“ママのエンパワメント”のための各種講座の受講機会を提供している。ママハウス開設の平成 23 (2011) 年 9 月にはママの“しゃべり場” (助産師・看護師・家庭相談員) を設けていた。その家庭相談の場で、ママから「仕事が見つかったが、仕事を流した」との話が出た。なんとかすべきだ。此処は被災地ではないか。許せることなのかと、保育の拠点場所がないかと探し始めた。幸にして、当時、「ママハウス」の開設地の平田第 6 仮設団地の当時の自治会長から、“我が家の 1 階をお貸ししましょう”とビルの 1 階の提供を受けることとなった。そこで、年度の切り替えが迫っていた春、助成金の申請を行ない、平成 24 (2012) 年 5 月には一時預かりの「虹の家」が開設できた。

浸水した地域ではあるものの、歩いて 2~3 分の高台には仙壽院と言う避難場所が有る。子供を連れて 5~6 分程度だ。非常の際を考慮し、子ども 3 人に 1 人の保育者という体制にした。いざ、避難と言う時は、背中に一人、両腕に一人ずつ抱いて逃げると言う体制である。本論では、「虹の家」の取り組みによって、預けたいママが保育者として就労できるようになった経緯を報告していきたい。

1. 幼児を抱える女性の就労

表 1 によれば、平成 26 (2014) 年度も若干の上下が有るものの有効求人倍率は 1 を超えおおよそ、1.3 前後を推移しているが、急激に落ち込み平成 27 (2015) 年 2 月は、1 を下回り、0.94 (釜石公共職安所 雇用の動き) となっている。2015 年に認定こども園が開園したものの、平成 27 (2015) 年の 6 月現在でも 37 名の待機児 (主として 3 歳未満児) がいる。待機児童の増加は確かに困った現象ではあるが、乳幼児を抱える若い女性は、被災地の釜石で働き続けようとしている。

待機児童の増加は働きたいママにとっては脅威であり、就労を阻害する要因で有るだけでなく、生活の安定と生活復興の疎外要因であり、看過できないと考える。復興公営住宅への転居、自力での住宅再建や、成長する子供の教育費などの家計の改善だけでなく、職場・地域・家庭での公私にわたる活動の機会を支援する観点からも、一時預かりの保育事業は継続実施したいと考える。

2. 活発な経済活動と人手不足

かつて、釜石女性の非正規雇用は全国と比較して高い傾向が有り、釜石への企業誘致は、女性のパートが集まり易く、人件費が抑制できると理解する事業主がいた。しかし、釜石

表1 ハローワーク管内別有効求人率

	平成27年4月	前月	前々月	前年同月
		平成27年3月	平成27年2月	平成26年4月
岩手県計	1.08倍	1.13倍	1.15倍	0.99倍
盛岡	1.01倍	1.04倍	1.03倍	0.86倍
釜石	0.94倍	0.99倍	1.03倍	1.16倍
宮古	1.08倍	1.12倍	1.22倍	1.24倍
花巻	1.17倍	1.24倍	1.32倍	1.04倍
一関	1.07倍	1.08倍	1.06倍	0.95倍
水沢	1.01倍	1.17倍	1.14倍	0.84倍
北上	1.64倍	1.71倍	1.78倍	1.28倍
大船渡	1.33倍	1.34倍	1.58倍	1.55倍
二戸	0.75倍	0.82倍	0.76倍	0.80倍
久慈	0.72倍	0.81倍	0.80倍	0.82倍

(パートを含む原数値)

のハローワーク管内の図1を見ると、求人数（グレー）が女性の求職数（黒）と男性の求職数（白）を合わせたものを上回っているのは、事務的職業と運搬清掃等の職業を除くすべての職業であり、女性の求職意欲の喚起を促していると言える。ただ、女性が希望する事務職については、求人に対し求職が多いものの、OA処理や会計などの処理経験者が少なく、ミスマッチが有ることがハローワーク側から指摘されている。「母と子の虹の架け橋」としてはこの指摘を受けて、社会のニーズと捉え、講座の開設を進めていきたいところである。

こうした経済状況を反映し、図2を見ると子育て期の30～34歳の世代は、20年前は50%の就業率であったが、平成22（2010）年は20ポイント上がって70%に達している。今は、80%に到達していると推測でき、乳幼児を抱えるママの就労意欲は喚起され、3歳未満児の待機の増加の背景となっていると考えられる。目下、釜石では、仮設住宅に住む世帯が復興公営住宅や自力での住まいの再建等に進み、こうした状況は、これまで見られなかった釜石外からの大手・中小の建設事業者の事務所の進出や、これまでの復興事業に伴う土木・港湾・建設・道路等の公共活動に伴う稼働者の流入、それに伴う消費

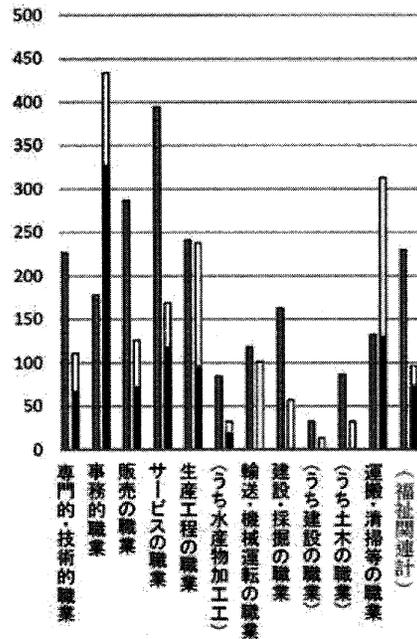


図1 釜石ハローワークに見る職種別求職・求人状況

(出典：厚労省被災3県のハローワーク別・職業別の求人・求職の状況)

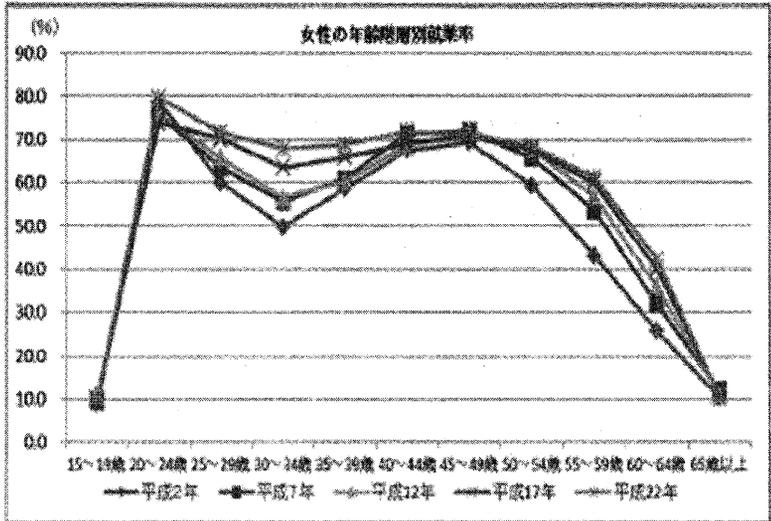


図2 女性の年齢別就業率

活動の活発化によって、大型ショッピングセンターの進出や地元商店主たちによる新たな商店街の形成（大町商店ほか）などの経済活動を活発化させている。賃金単価も600円台から700円台へと単価は上昇し、雇用を喚起しているとみられる。

岩手県経営者協会が行った県内企業の2014年度調査では、図3でみるとおり「雇用人員の不足感の広がり」が浮き彫りとなった。2014年度上期（4～9月）の人手の過不足感の問いに「不足」と答えた企業の割合は、調査を始めた2009年度以降最高となった」とある。その要因として、より良い労働条件を求めて労働力が県外や首都圏に流出していると書かれている（2014年度「景気・雇用動向調査」）。

釜石は建設・工事関係で、何回も入札が成立しない契約不調が起きている。資材の高騰もあるが、建設業界では人材不足であり、人手不足は深刻だった。もとより、医療・福祉系の人材も枯渇していて保育士や看護師の専門職種の募集を行っても、市内での応募者は無い現状である。

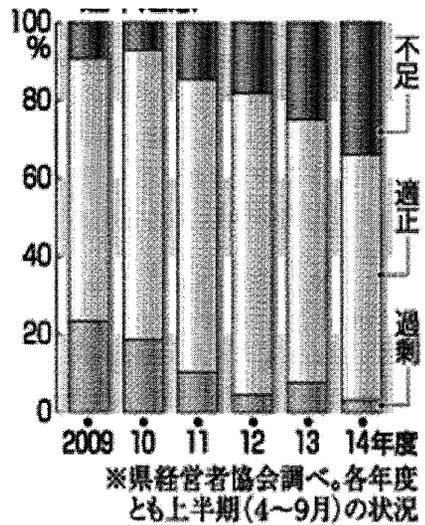


図3 雇用人員の過不足感

（出典：岩手県経営者協会2014年度「景気・雇用動向調査」結果）

3. 増え続ける待機児（保育所に入れない子）と保育所の変化

子供を抱えた世帯にとっては、生活再建・生活復興は待ったなしである。こうした状況の中、求人数は求職者を上回っている。

これまで4月の待機児は無かったものの、表2でみるようにこの2年間程度は待機児が発生し、釜石における保育の定員数は増加している。現在、保育所入所を待つ母親は50名いる状況である（2015年4月現在）。

表2 待機児童の推移

年度	定員	入園児数		
		4月1日	4月1日	10月1日
H15	410	448	27	-
H16	410	465	8	14
H17	410	458	40	31
H18	435	461	24	22
H19	465	475	6	13
H20	510	512	2	2
H21	495	523	0	9
H22	495	531	0	15
H23	490	488	0	8
H24	490	530	3	19
H25	520	537	0	23
H26	520	565	39	30

釜石市では、年度の初めから発生している待機児解消を目指して、保育定員の拡充と入所数を増員する形で保育の整備を進めている。民間でも事業所内に保育所を備えたところもあるものの、容易には待機児が解消しない現状はある。「甲東こども園」に次いで、「釜石子ども園」が幼保連携の「認定こども園」として誕生した。待機児の多くが3歳未満児であることから、保育に欠ける子どものための保育所的機能と幼稚園的機能を備えた幼保連携の園は、待機児解消の効果も期待できる。

このような取り組みを受けて、3歳未満児のママの就労意欲はさらに上がり、その結果として待機児を加速度的に増加させているものと考えられる。しかし、こうした経済活動に伴う女性の就労意欲を吸収できる保育の整備がいまだに追い付かない。

年少人口の減少に歯止めを掛けたい国の政策として「子ども子育て新支援制度」が平成27（2015）年度から本格実施されている。釜石の子育て環境はどうか。全国における特殊合計出生率は平成15（2003）年から17（2005）年までは徐々に下がってきていたが、エンゼルプラン等いくつかの子育て環境の改善の施策効果が出ていたのかと思うものの、釜石の出生率は全国や岩手県を含めそれを5ポイント程度も上回っており、被災地ではあるが、出生率はさほど低下していない。故に、その中で就労意欲の高まりは、乳幼児の待機に繋がってくるのではないかと考える。平成27（2015）年6月現在の待機児は41名と増えている。

4. 就労と子育ての課題

ワークライフバランスが、子育て世代のパパとママにとって必要であるが、職場・家庭・

地域でその体制が十分ではない。

正規就労を望む女性に、経理・会計などパソコン（ワード・エクセル）を使う事務などの専門知識や経験を求める求人条件に対して、対応できる求職者は多くない。求人と求職にミスマッチが起きている。

25歳以上の求職数の低下は、女性の結婚・子育てでの離職傾向が影響しているのだろうか。母親の就労状況を図4で見るとフルタイム勤務者が4割近くを占めている。一方で約3割が以前就労していたが、現在は就労していないという。この要因は何であろうか。釜石で働き続けることが出来ない要因を探ったアンケート結果が図5の仕事辞めた時の理由である。

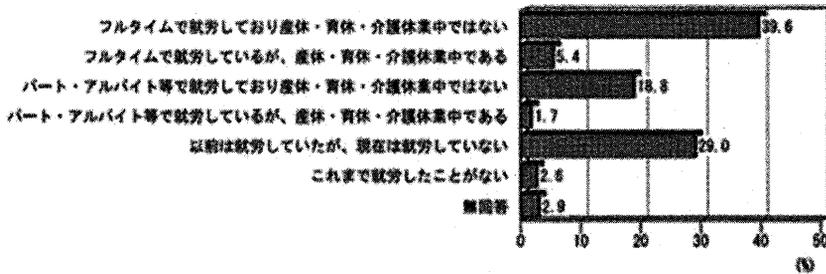


図4 母親の就労状況

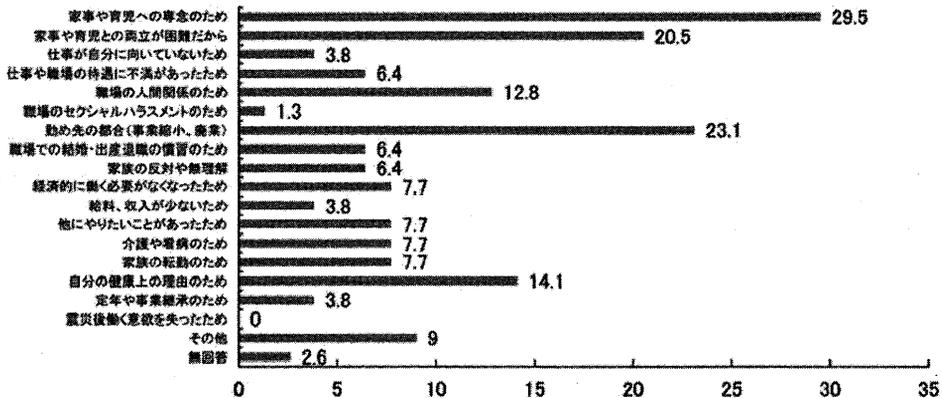


図5 仕事を辞めた理由

(出典：図5「釜石市男女共同参画推進プラン」より「釜石市男女共同参画推進プラン改定に関する市民意識調査報告書」2013年実施)

母親の就労継続の課題は、働く母親の第1が就労と子育ての両立への支援要望であり、ワークライフバランスが女性だけでなく男性に取れていない事が、就労継続できない要因と伺える。次いで子育てしやすいまちづくりであり、保育サービスの充実が求められていることを示している。

しかし、図 6 で見るように釜石の合計特殊出生率は全国平均および岩手県と比較し、0.4 から 0.5 ポイント高い。これは、出産年齢にある女性が釜石市で出産・子育てをしているきざしと推測される。

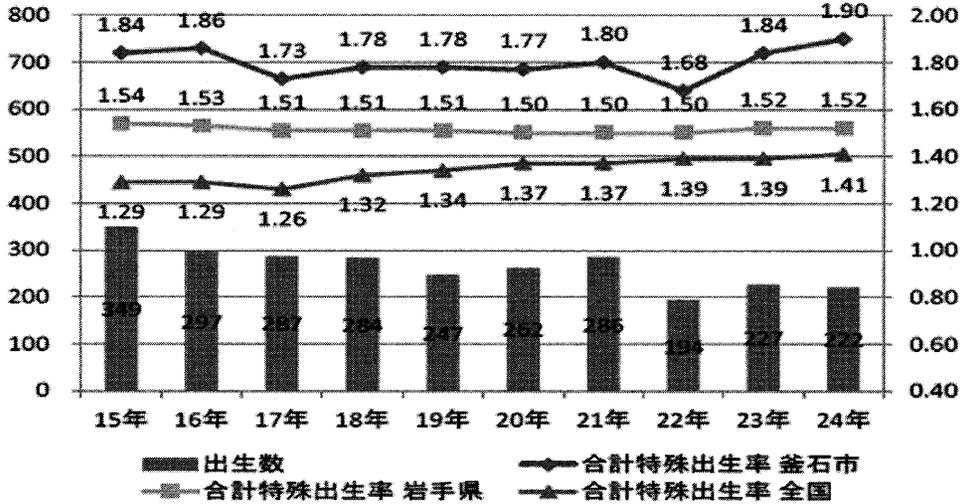


図 6 全国・県・釜石の合計特殊出生率

II 釜石の子育て世代への「ママハウス」・「虹の家」の取り組み

震災間もなく、平成 23 (2011) 年 7 月頃には、釜石でも仮設住宅が整備され始めて、内陸に避難していた市民も順次市内の仮設住宅に入居してきた。「母と子の虹の架け橋」は、市内の一番戸数の多い平田第 6 仮設団地内に、妊産婦ケアを目的に「ママハウス」を開設して今日に至っている。コンセプトは『母と子の笑顔広げる』である。ママに笑顔があれば、パパも子供も笑顔でいられる。ママに目標ができ、生き生きと暮らすことができれば、地域も元気になる。それは地域復興、生活再建の源になると考えているからである。

1. 職の確保と子育て環境

釜石では平成 26 (2014) 年度、大型ショッピングセンターも開設され、飲呑横丁も復活し、地元の商店街が大町に設けられたことや新規ホテルもオープンされるなど、経済は活況を呈している。また、事業所内保育所も 2 か所から 3 か所へと増えた。ママたちはこの流れが継続できれば、職の確保も保育確保も可能になるのだが、復興特需に基づく一過性の現象で無ければよいのだがと、感じている。

また、子ども・子育て支援新制度が平成 27 (2015) 年 4 月にスタートした。認定こども園が、幼保連携型・幼稚園型・保育所型・地域型と分かれ、これまでの認可外保育所と家庭的保育事業が地域型保育として 3 歳未満の子の保育に当たることとなった。「ベビーホーム・虹」と「虹の家」は、地域型保育となった。

しかし筆者は、子育て世代の定着には、職と住まいと保育の場の 3 点確保が要件であるとする。次世代の釜石を背負う児童・生徒の健やかな成長のためには、遊び場とスポー

ツが出来る地域環境の整備も必要だ。これらは、市民と行政と NPO の三者連携が欠かせない。復興を進める上で最も重要なことについてはアンケート結果によると、職の確保は収入に繋がり、収入が子育て支援でもあった。

筆者の運営する「ベビーホーム・虹」も「虹の家」も子どもの最善の利益をできる限り追求したいと現場スタッフは努力している。そのためには、研修の時間確保や、スタッフの余裕ある配置が必要である。

更に、保護者同士が支え合う場を用意することが大切だ。例えば、迎えに来たお母さんの顔色が暗かったりしていると率先して声を掛け、話を聞くことにしている。

2. 「虹の家」・「ベビーホーム・虹」と3歳未満児のC型小規模保育所

釜石市は待機児対策のため、待機児解消加速プランの小規模保育所として、平成 26 (2014) 年 8 月、「ベビーホーム・虹」を、平成 27 (2015) 年 6 月には、さらに 1 箇所の「虹の家」を受託した。

釜石市大只越町にあった『虹の家』は、0 歳～6 歳までの未就学児を対象とし、早朝や延長保育も含めると、月曜から金曜の朝 7 時半から 18 時半の間、1 時間から子どもの預かり保育を行った。表 3 のように、他の施設やサービスと大きく異なるのは、ママが就労に有利な資格取得の為に勉強時間がほしい、スキルアップ講座に参加したいといった理由の他、通院したい、気分転換に出かけたいといった、ママのニーズに応える“時間”を提供していたことである。「虹の家」の 26 年度の保育児数は延 2,503 人で、開所から平成 27 (2015) 年 5 月末までの保育児数は延べ 6,230 人で有った。

表 3 「虹の家」の年齢別・預かり要因別実績表

		0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	計
就労	人数	30	55	96	4	0	2	0	187
	延べ人数	357	711	1224	38	0	5	0	2335
研修 (ハローワーク)	人数	0	0	0	0	0	0	0	0
	延べ人数	0	0	0	0	0	0	0	0
研修 (その他)	人数	11	1	2	0	0	0	0	14
	延べ人数	95	3	5	0	0	0	0	103
就活	人数	3	0	2	1	0	0	0	6
	延べ人数	4	0	3	1	0	0	0	8
家事都合	人数	12	1	2	1	0	0	0	16
	延べ人数	38	4	3	1	0	0	0	46
講座 (ママハウス)	人数	2	0	1	0	0	0	0	3
	延べ人数	10	0	1	0	0	0	0	11
計	人数	58	57	103	6	0	2	0	226
	延べ人数	504	718	1236	40	0	5	0	2503

C型小規模保育所「ベビーホーム・虹」・「虹の家」の保育事業

「ベビーホーム・虹」は定員 15 名の小規模保育 C 型である。閉園した釜石市立小川幼稚園（同市小川町）の園舎を利用し、保育士のほか、研修を受けて市が認定した保育者もスタッフとして常駐している。利用は 3 人からスタートしたが、平成 27 (2015) 年 2 月に、定員の 15 名になった。ここでは土曜日も保育をしている。「虹の家」「ベビーホーム・

虹」どちらも、ママたちの生活再建と生活復興の支援が目的である。「母と子の虹の架け橋」の活動拠点は釜石市内では、母子支援、一時預かり保育は3施設目になる。母親が安心して子どもを預けて働けるよう支援することで、その家族や地域全体も明るく元気になることを目指した。

現在、新たなC型保育所「虹の家」もスタートし、6月15日からは給食も実施している。

基本的な保育スケジュール

「虹の家」同様、「ベビーホーム・虹」は、体力作りと自然観察を兼ね毎日散歩を実施している。乳母車での移動ではなく、自分の脚で安全な通路を確認したコースで、歩きたいという“虹っ子”の気持ちを大切に、年齢に合わせた速度で散歩を楽しんでいる。その散歩コースは階段有・小山が有りと、子どもにとっては起伏あるコースで、“歩くの大好きっ子”が誕生している。そのためか、元気にたくましく成長し、これらの相乗効果で感染症の集団発生はゼロである。

子どもたちの日中保育は、①登園して直ぐに検温⇒②看護師が時間毎に健康状態チェックをする⇒③自由遊び又は音楽教室⇒④おやつ・水分補給⇒⑤トイレ・おむつ交換⇒⑥散歩（散歩は、雨降り以外毎日実行している。自然への触れ合いと観察を重視。）⇒⑦お弁当⇒⑧お昼寝⇒⑨おやつ⇒⑩自由遊び⇒⑪お帰りの流れで、子どもの関心を見守りながら、生活リズムを大切にしている。

保育者になるための講座

「虹」で開講した保育養成講座の受講者アンケートからは、「発達過程における特徴やケアのポイントが学べた」、「沐浴は勉強に、トイレ・トレーニングの講義内容は興味深かった」、「子どもの病気は、色々な症状があり対処法も様々で改めて責任がある仕事なんだと考えさせられた」、「調乳の実習・病気のチェックポイントなどとても参考になった」、「病気や事故が起こらない」、「万が一起こった場合の対処法等も学べた」、「子どもにとって“あそび”はとても重要なものだとうわかった」、「心肺蘇生法は、幼児と乳児で対応が違うところがあったので、きちんと覚えておこうと思いました」、「折り紙の折り方で子どもを喜ばせたい」という感想が寄せられ、講座の受講生が、「誰かの役に立ちたい」、「この学びを生かせる仕事につければ最高」と現場に出ていきたいとの意欲が見られている。

第2回平成27（2015）年6月開講の保育養成講座の修了生16名中11名は「ベビーホーム・虹」に就労している。待機児解消の一環としてスタートしたC型小規模保育対応の「保育者養成講座」は、保育を必要とするママが当事者同士で支え合う構図となっている。

3. 働くママを支える釜石のママ

「ママハウス」では、平成26（2014）年度は特に力を入れて、釜石で希望の職に就労できる条件づくりとして、秘書検定2級取得の講座及び、コミュニケーション講座や、起業講座などを展開してきた。更に、「ママハウス」では、他のNPO団体や行政と連携して支援活動に動く人材の養成の観点で、相談に対応する「女性相談員養成講座」を計3回、市及びNPO団体との連携・協力で取り組んできた。

これまで、ビジネス関連のスキルアップ講座を展開してきたが、平成26（2014）年度の受講生は490名に至っている。これは、キャリア形成講座数を増やしたこともあるが、表4のとおり、平成23（2011）年度は21人、平成24（2012）年度は107人、平成

25（2013）年度は157人とこの約4年間参加者数は大きく伸びていることに由来すると考えている。

学ぶこと、就労することの意欲の高いママ達に、「母と子の虹の架け橋」は、小規模保育施設の従事者養成講座として表5の時間割で「保育者養成講座」を行っている。

本年の養成講座では、保育士及び看護師も含め、計14名の受講生が市長から講習修了の認定証交付を受け、「ベビーホーム・虹」及び「虹の家」にて、保育者として就労している。

尚、本講座の受講者アンケートからは、「発達過程における特徴やケアのポイントが学べた」、「沐浴は勉強に、トイレ・トレーニングの講義内容は興味深かった」、「子どもの病気は、色々な症状があり対処法も様々で改めて責任がある仕事なんだと考えさせられた」、「調乳の実習・病気のチェックポイントなどとても参考になった」、「病気や事故が起こらない」、「万が一起こった場合の対処法等も学べた」、「子どもにとって“あそび”はとても重要なものだわかった」、「心肺蘇生法は、幼児と乳児で対応が違うところがあったので、きちんと覚えておこうと思いました」、「折り紙の折り方で子どもを喜ばせたい」という感想が寄せられ、講座の受講生が、「誰かの役に立ちたい」、「この学びを生かせる仕事につければ最高」と現場に出ていきたいとの意欲が見られている。

釜石の働くママ世代への保育を通じた支援として、「保育者養成講座」の修了生を迎え入れたC型小規模保育であるが、平成26（2014）年度は、さらなるスキルアップのためのフォロー研修として、「ベビーホーム・虹」の保育者は、市立上中島保育所（連携協力園）への派遣研修を1日、実施した。

加えて、ベテラン保育士のアドバイザー（月1回・半日、保育に参加する現地研修）は改善点等の指摘と保育者の相互意見交換を行い、保育の専門知識や心構え、対応の仕方についての助言を受け、日々の現場保育に活かすことを行っている。

Ⅲ. 釜石のママの課題の背景にある“制度的な問題や慣習”

「釜石市男女共同参画推進プラン」より「釜石市男女共同参画推進プラン改定に関する市民意識調査報告書」によれば、就労を辞めた理由として、「家事育児に専念するため」と言うのが約30%ある。勤め先の都合と言う本人に由来しない理由での離職は、震災で職場が失われたことを示しているのか、釜石ならではの立った理由が見て取れる。一方で、両立が困難だからが20.5%、健康上の理由が14%、職場の人間関係が約13%と高い回答を示し、何れも働ける子育て年代層へのキャリア形成やストレスケアや女性従業員の職場環境の改善が必要なのことがわかる。

平成25（2013）年にママハウスのママサポーターが、「母と子の笑顔を拓けることを阻害しているものは何か」について意識調査を記述式で行うと同時に、聞き取り調査も行った。第一に、経済的側面については、「収入が低いため、将来へつなげる見込みがない」、

表4 講座受講者の推移

講座名	受講人数一覧			
	26年度	25年度	24年度	23年度
秘書検定講座	39人			
保育者養成講座	150人			
各種スキル講座	301人	157人	107人	21人
計	490人	157人	107人	21人

表5 2014年度 育者養成講座日程とカリキュラム

第1回目	5月7日(木)	保育制度と保育サービス 保育マインド(1)
第2回目	5月13日(水)	保育マインド(2) 心身の発達と日常のケア 栄養と食事のケア(1)
第3回目	5月14日(木)	栄養と食事のケア(2) 確認テストでフォローアップ 病気と事故・安全管理(1)
第4回目	5月20日(水)	病気と事故・安全管理(2) ケアとコミュニケーション 日常生活と遊び(1)
第5回目	5月21日(木)	日常生活と遊び(2) 確認テストでフォローアップ 精神発達と遊び(1)
第6回目	5月27日(水)	精神発達と遊び(2) 学童期のケア 保育現場視察実習
第7回目	5月28日(木)	保育のお仕事 認定試験 個人事業主としての財務管理 実施自治体の制度について
1日目		心肺蘇生法
2日目		実習見学

5月7日～5月28日

場所：カリタス釜石オープンハウス 会議室
釜石市大只越町2-4-4 TEL 0193-27-9030
時間：10:00～16:30(休憩1時間)

実習

「共働きで無いと将来のビジョンが見えない」、「何時までも親頼りにもできず、かといって、自分が親を養っていく親も扶養できるくらいの収入が無い」を挙げている。みんながママになりたいと思える環境が必要で、出産一時金 42 万円は釜石市から給付されるが、それでは足りない。一時保育料は1日 2700 円～2500 円は高い。釜石では既に第2子以下の保育料は無料であるが、第一に保育料の補助を出すことも必要だと言うママの声も聞えて来た。第二に子育ての負担感軽減である。子どもを持つことは不利なようにさえ思える世の中だ。子どもがいると安定した職に付けにくく、保育先の確保も至難である。また、生活面でも、子育て時間と自分時間・家族時間(ワークライフバランス)の男女差が有る。時間の余裕、仕事・家庭・育児に対して夫の協力が必要だ。子どもが優しくなれるために、母が精神的にも身体的にも安定している状態が必要である。幼稚園が休みの時に預けられる場所も必要である。また、孤立しない子育て環境が必要で、ママハウスのような、自分時間の確保のための、託児施設があれば良い。子供と離れて自分の時間を持ちたい。

交流の場として、「気軽に行ける、ゆっくりできる」、「コミュニケーションが取れる、美味しい食事ができる」、「自分の無理のない程度で働ける、楽しく育児しながら、遊びな

がら、働きながら...」、「お金をかけず遊べる場所が必要」と言う声が多くみられる。あるいは、「お金をかけても遊びたい!」と思える室内遊技場が欲しい」、「悩みを話せる場所も欲しい」、「ABCcooking など、お料理教室に通って、美味しい料理を家族のために作る」、「体験型のツーリズムが有れば（親子でホヤ・カキトリ、親子で畑仕事、他色々）良いな」との声も出た。ママたちは気分転換を求めていることが分かる。

ストレスフルな状況の時、大型ショッピングセンター・イオンの開店によって、おしゃれなブティック・スポーツ用品、洗練された商品が見え、ゆっくり買い物が楽しめ、おしゃべりなどで不満感も吸収されるようになってきた様だ。

IV. まとめ

保育者は子どもの発達に適度な刺激を無理なく自然に、好奇心を活かして育てるものだと思っている。幼児の発達はモデリング（模倣）が発達を促すことから、小規模多機能である年上の子供と年下の子供が一緒に生活し合う、C型保育はむしろ進んだ保育環境が整うことではないかと感じている。

0歳から3歳未満の月齢の差のある子供を、「ベビーホーム・虹」は定員15名で、5人の保育者が、「虹の家」は定員10名で4人の保育者が関わり、一人一人に目を配れる理想的な生活の場＝保育環境であることに意を強くしている。「虹の家」では、保育者の質の高い関わり合いを目指していくことを目標に、研修機会を拡大すると共に保育士の資格取得の便宜を図っていきたいと考えている。

保育所設置認可等の基準に関する指針（厚生省令第63号）では、定員は60人以上であることとされ、年齢別配置基準は、0歳児は3:1、1-2歳児は6:1、3歳児は20:1、4歳児は30:1である。少ない保育士で大きな集団となっている。

その点、「ベビーホーム・虹」も「虹の家」も15名・10名の定員の小規模保育であるから、保育者と子どもの比率は1対3で有り、目が届く人数と考える。

小規模保育だからこそ、保護者の安心と信頼を形成するため、子どもの送迎時、朝は看護師が保護者に対し家庭での過ごし方や朝の状態を伺い、帰りには保育士又は看護師が虹の家での過ごし方を伝え、常に保護者とのコミュニケーションを良好に保つよう努めている。この毎日の継続が、保護者の方々とスタッフとの信頼関係の構築に繋がり、その良好な関係が得られている。

<引用・参考文献>

釜石公共職安定所 2014 雇用の動き

釜石市子ども・子育て支援事業計画（釜石市子ども・子育て応援プラン）2015年3月

池上キヨ 1970 国際児童福祉会議とスウェーデンの保育事業—欧州児童福祉視察団に参加して— 研究紀要 創刊号 日本教育 p 64-85

山田昌弘 2007 少子社会日本 もう一つの格差のゆくえ 岩波新書

土境内昭雄 2006 人口減少で読み解く時代 輝く社会と人生のデザイン ぎょうせい

早瀬保子他 2002 ジェンダーと人口問題 大明堂

男女共同参画推進本部 2008 女性の参画加速プログラム（多様性に富んだ活力ある社会

に向けて) 平成 20 年 4 月 8 日

児童福祉施設の設備及び運営に関する基準 (昭和 23 年厚生省令第 63 号)

外岡秀俊 2012 3・11 複合被災 岩波新書

岩手県経営者協会 2014 2014 年度景気・雇用動向調査

若菜多摩英 2013 被災妊産婦及び母子支援活動の課題に関する研究 —花巻・釜石「ママハウス」の実践例を通して— 岩手大学大学院人文社会科学研究所人間科学専攻修士論文 (未公刊)

付記:

表 1 出典: 厚生労働省「被災 3 県の雇用情勢」

図 2 出典: 釜石市子ども・子育て支援事業計画

(釜石市子ども・子育て応援プラン) 平成 27 年 1 月 P10

図 4 出典: 釜石市子ども・子育て支援事業計画

(釜石市子ども・子育て応援プラン) 平成 27 年 1 月 P29

図 6 出典: 釜石市子ども・子育て支援事業計画

(釜石市子ども・子育て応援プラン) 平成 27 年 1 月 P7